

野良着に魅せられて

— 民俗と衣生活 —

藤 田 芳 津

はじめに

この地域は早くから開け、時代、時代の歴史を多く残している。弥生時代中期のものといわれる磨製石斧が丸山に続く台地（精華中学校）から出土し、また石包丁が乾谷から発見されていることから原始時代の人々は住居をこの辺にかまえたと思われる。稲穂を刈る石包丁が示すように弥生時代には農耕が行われているのがわかるのである。五世紀頃から帰化人が住みついたことは農耕技術に大きな進歩をもたらしたと思われる。地名においても「四ノ坪」「五ノ坪」などと整然と区画され、条里制のあとをとどめている。「粕の瓜づくり」と古代の歌にも残されているわが郷土の歴史に思いを寄せる中で、農業に携わった人々の衣生活に興味を見出し、まず周りから調査し、農作業の衣服などがどのように生活の中に生かされているかをまとめてみた。

衣生活も、めまぐるしく変わる世の中によって形態は変化している。野良着（仕事着）も農業政策の転換、機



昭和 23 年ごろの冬の男の野良着 (図 1)

械化によって変わってきた。昔の、泥にまみれ小川で泥を洗い家路についていた風景も、今では見られなくなった。その頃の野良着も家の奥のほうに埋もれてしまっているものが多い。が、まだ精華町では紺紵を野良着としている人も多い。興味のあることなので調査を行うことにした。

野良着

○上衣

図 1 は冬の男子の服装である。私の祖父が終戦間もなく(昭和二十三年頃)の初冬頃、コクマ(燃料になる松葉)を集めに出掛けた時の姿である。場所は北稲八間大路(フラワーセンターの辺り)付近。

男子の上衣は紺生もめんの半纏を着る。半纏をコイクチという。袖口の型が鯉の口にそっくりなのでコイクチと精華町最近の野良着(図 2)の辺りでは言う。冬にこの型と同型で綿を入れるとドンチャン、ドテラといい保温用によい。現在の男子の野良着は図 2 のように作業シャツ。手口が汚れないように筒型の手甲を着けている。

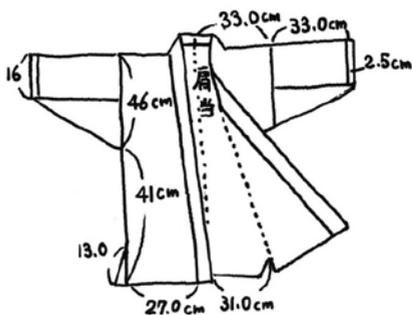


最近の野良着 (図 2)

図 4 は図 1 と同時に撮影した祖母の写真である。女子の上衣は野良着の上へ冬はデンチ、オイネを着用する。



昭和 23 年ごろの冬の女の野良着 (図 4)

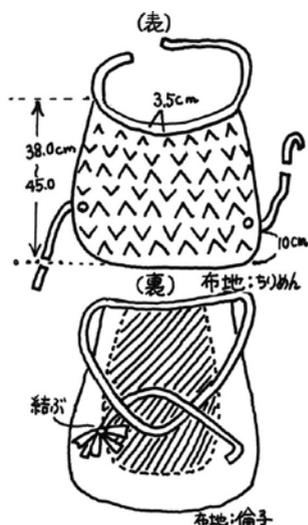


オィネ (図 6) は背中だけに当てるが温かい。小さく軽い
ため活動しやすい。胸の所で紐を襷のように掛けて結ぶ。
布地は作業等には木綿を使うが、おしやれ着、くつろぎ着
として着物地の廃物利用で構成していた。この型は戦時中
の服としてモンペと共に着装した。戦時中の決戦服とされ
ていたが戦後は作業着。保温のために着用。ノラギ、ウワ
ツパリ、ヒツパリという。その材質は紺もめん七十歳代
の女子の嫁入り前は必ず自分の家のハタヤで織った紺がす



最近の冬の女の野良着 (図 5)

る人もいる。紐つきもんぺは七十歳〜八十歳の人のみ着用。最近脇を縫い上げた上部にゴムを入れ、ずぼん形式になり着脱が便利になった。もんぺが女子の野良着となったのは戦時中に婦人の活動着として普及された時からである。もんぺを穿く前は腰巻を着用していた。もんぺは野良着として大きい改革といえる。



オイネ (図7)

男子はこのバッチとコイクチとを合わせ着用した。女子はもんぺを持っていく人は多いが季節に合わせて着用。夏はもんぺを着用し冬はトレパンやずぼんと併行している。北稲地域でも、昔は綿を栽培、手織りにしていた。各家々にハタヤ(機屋)があり、家族の衣類を織った(昭和二十年頃まで)のである。



オイネ (図6)

○下衣

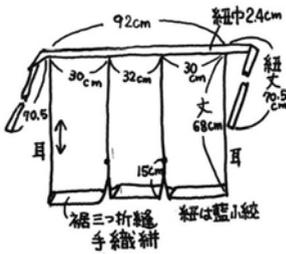
男子は下衣にバッチを穿く。図1の着装が紺バッチである。祖母が縫ったもので穿く人に合わせるので苦心していたようである。最近ではほとんど見られなくなった。

りを持参した。「相楽木綿」は近くでは地方の名産とされていたようである。

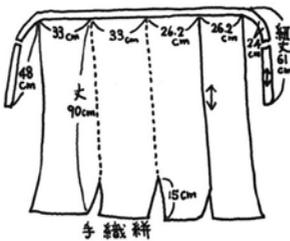
マエダレは紺緋が使われ、野良着の上から着るので保温、汚れ防止として重宝である。もんぺに比べると柄が大きい。若い人は赤い紐をつけて女性の華やかさを表現している。紺緋に赤いひもという色彩は忙しい農作業の目の保養にもなる。ちょっとしたお洒落と思つて良い。



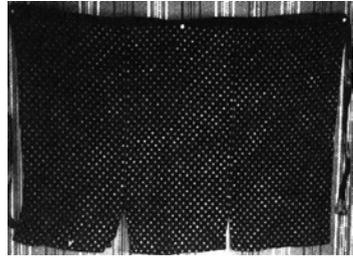
二巾マエダレ (図 10)



三巾マエダレ (図 11)



四巾マエダレ (図 12)



三巾マエダレ (図 8)



四巾マエダレ (図 9)



マエダレをつけての草取りの姿 (図 13)

二巾か一巾半で膝下(六十センチメートル)丈のものが多いが、三巾、四巾で丈の長いものもある。図9のような利用の方法がある。昔は腰巻き姿の野良着であったため、その上に四巾前だれを掛け、保温、汚れ防止として着用したのである。

図13の腰を屈めているのは、草取りをする時、稲穂が股に擦れて気持ちが悪いのを防ぐためで、その裾を股の間から前へまわして前紐に挟み大腿部を保護している。大きい前だれは現在でも納屋で作業する人は冬キルティング地のものを使用。夏は洋服の布地を使用している。保温と汚れ防止である。ここでもまた、お洒落の一部とも考えられそうである。前だれは着用する事によって働く意欲が湧き、そこに女性らしい、柄選びで装うことの楽しさ喜びが生まれる。

○かぶりもの・はきもの

手拭を被るのは陽除け、汗止めの役を果たす。姉さん被りの被り方は、かつては村単位で少しずつ違っていたらしい。

帽子 夏は麦藁帽子、手拭、布製スポーツ帽子を被っている。フード付きの帽子も市販され冬は保温の役を果たしている。野良着(ヒツパリ)を着用せずブラウスに洋式前掛け、ゴム入りもんぺである。家庭の作業衣のま